

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目： 若手研究 (B)  
 研究期間： 2006 年度 ～2008 年度  
 課題番号： 18730450  
 研究課題名 (和文) バウム技法の体験様式についての探索的研究—描画過程の“揺らぎ”体験  
 を中心に—  
 研究課題名 (英文) An explorative study about baum technique  
 - focusing on an experience mode -

研究代表者 山川 裕樹 (YAMAKAWA HIROKI)  
 成安造形大学・造形学部・専任講師  
 研究者番号： 70367887

## 研究成果の概要：

本研究は、バウム技法の主観的体験様式を、可能な限り言語化していこうとする試みである。描画過程は、そのプロセスが内的なものであるため、それを言語に落とすことが非常に困難である。そのプロセスを問うても「なんとなくそう思って」としか表現できない、無意識的な領分に属する体験となる。本研究は、その体験を、戸惑いや迷いが生じる際の“ゆらぎ”体験を通して明確にしようとする研究であった。

研究を進めるにつれて、“ゆらぎ”体験の言語化はあまりたやすいものではない事が明らかになった。そこで、バウム技法の体験様式を明らかにするために、描出されたバウム画をイメージで把握しその言語化を求めるという方法に着目し、描かれたバウム画に絵で返答を返すという「バウム返答法」の創案に至った。それが描き手の体験と平行であるかは今後の研究を待たねばなるまいが、バウム画の解釈を外在する基準に求めがちな原稿のバウム画解釈法に、別の視点からのアプローチがありえることを示唆するものであると思われる。この「バウム返答法」は、精神分析で云われる逆転移の活用にも似た、生身の人間の出会いであるからこそ必然的に引き起こされるわれわれのイメージの共揺れを俎に乗せる、心理臨床の現場感覚に根ざした方法論の可能性を示すものであるだろう。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,800,000	0	1,800,000
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	210,000	3,810,000

研究分野：心理臨床学

科研費の分科・細目：心理学、臨床心理学

キーワード：臨床心理学、心理検査、バウム技法

## 1. 研究開始当初の背景

現在バウムテストは、描かれた木について、筆跡学や象徴理論などをもとに解釈するのが殆どである。しかし、これらの解釈法が基

礎におくのは、バウム技法にとっては外在の、いわば「借り物」の理論であるため、時には、きわめて表面的で当てはめ式の解釈に陥る危険がある。

描き手は「実のなる木を描いてください」

という言葉をきいて、描く過程でどのような木を思い浮かべたのか。こころの中に思い浮かべた木を実際に描く中で、どのようなことを感じ、考えたのか。そして描かれた木を見てどのような印象を抱いたのか。これまでのバウム研究では、こうした一連のプロセスにおいて、描き手にどのような内的体験が生じているのかが殆ど省みられていない。

筆者は大学院在籍時より、このような内的体験に焦点をあてようと研究を続け、その成果については折にふれ報告している。その後のバウム画に関する研究においてしばしば報告されたのが、思い浮かべた木を実際の紙に描く際に感じる戸惑いや迷いであった。しかしながら、ここで報告されたような戸惑いや迷いについては、これまでの研究では殆ど見逃されてきていた。それゆえ筆者は、このような戸惑いや迷いという体験に着目して、あらためてバウム技法における体験を見直す研究を行いたいと考えている（なお、本研究においては、このような、描く過程で生じる戸惑いや迷いを“ゆらぎ”体験と呼ぶ）。

## 2. 研究の目的

今回取り上げた視点に基づいた研究は今まで行われていない。それゆえ、本研究は上述の視点からデータを収集することをまず第一の目的とする。そして、そこで得られたデータを分析・類型化し、そこから描画過程並びに描画体験に探索的かつ細やかに迫っていくことを第二の目的とする。そのため、具体的に、以下の三つの切り口を用いる。

(1) バウム画を描く際の“ゆらぎ”体験とその対処について

バウム画描出時に感じる“ゆらぎ”体験（戸惑いや迷い）と、それへの対処法を問い、その類型化を試みる。“ゆらぎ”体験が生じるのは何らかの“引っかかり”が生じる点であり、そこは言語化・意識化されやすいことが予測される。

(2) こころに思い浮かべた木と描かれたバウム画について

“ゆらぎ”体験の中でも、「思い浮かべたイメージ」と「描かれた絵」の関係に着目する。この両者がどのように影響しあって最終的な絵の完成に到るのかを検討する。

(3) 「実のなる木」という教示がもたらす心理的効果について

バウムテストとは、「実のなる木を描いてください」という言葉を契機に引き起こされる一連の体験である。その発端としての教示そのものに着目し、この言葉が持つ効果を明らかにする。

## 3. 研究の方法

平成 18 年度

- ・“ゆらぎ”体験とその対処について、まず量的なデータを収集しデータベース化を行い、それを用いて類型化する。
- ・「実のなる木」の教示効果を問うための資料を収集する。

平成 19 年度

- ・実際の絵を描くプロセスにおける“ゆらぎ”体験を、美術学生への聞き取り調査を通じて明らかにする。
- ・イメージ体験とその言語化の可能性についてあらゆる角度から検討を試みる。
- ・バウム技法を、「実のなる木」の描出を含めてのイメージ技法の観点から、資料を収集する。

平成 20 年度

- ・研究全体を振り返り、バウム技法で生じる内的体験過程を総括する。同時に、その視点を用いることで従来のバウム理論をどう位置づけられるかの検討を行う。また、その視点を、バウム技法に精通した心理臨床家や、バウム技法を使って間もない心理臨床の初学者に提示し、その意義を検討する。

## 4. 研究成果

本研究は探索的研究であったため、研究プロセスをまず提示する。そして、研究の中で明らかになってきた“ゆらぎ”体験を問うことの妥当性と、そこからの発展としての「バウム返答法」の研究成果について報告するものとする。

2006 年度

本年度は、質問紙調査を中心に研究を行った。バウム画を描出する課題を集団で施行し、その時の体験をもとにデータベース化し、分析を行った。また、幹先端処理について改めて問い直すため、あらかじめ幹となりうる線を描出済みの用紙に樹木画を完成させるスタイルの質問紙も施行した。これらのことからバウム画を描く際の困難さにまつわる資料は概ね収集されたものだと考える。

今後は今回得られた課題を元に、さらに樹木画そのもの、描出過程そのものについて探求していきたいと考えている。人にとって樹木を描くとはいかなる意味を持つのか。そしてそれを意味ある課題として考える際にはどのような心理的メカニズムが働くのか。樹木画に限定されず、広く人間学的視野をもってこの課題に取り組んでいきたい。

## 2007年度

本年度は、美術を専攻する大学生とともに研究会を組織し、作品制作過程における内的体験を問うことから始まった。作品を制作する過程において、どのような心的プロセスをたどるのか、その言語化を求めたが、そこから浮かび上がってきた事実には明瞭になった点と困難な点と両面存在した。

ポジティブな点としては、まず、制作過程はその心的なプロセスとパラレルになっていることが報告された。それはたとえば、こころの中の葛藤や迷いを抱えているときに、それが直接・間接に絵に現れていると云うことであったり、そうした主題で描いていないにもかかわらず絵を描き終えたときにある葛藤が（なぜか）解決していると云うことであったりといった体験の存在が報告された。これにより、われわれが内界で抱くイメージ体験の持つ大きな可能性は一層明確になったと思われた。

しかしその一方、あまりにもそれがプライベートな事柄であるため、それを言語化することの困難や、また、絵でしか表せないことを言語の水準に引き上げてしまうことの難しさも感じられた。それは、想像の翼を無理矢理もぎ取るかのような、心理臨床的配慮を欠くと思わせる体験であった。

研究会でのこうした報告を背景に、バウム描画過程の心的ふり返りは、「ゆらぎ」体験を媒介としたとしても、想像以上に困難であることが予想された。実際に、バウム技法を実施し、「ゆらぎ」体験の言語化を問うてみたが、質問紙調査以上のことは出でず、踏み込むことのリスクより、敢えて触れない守りの方が重要であると思われた。

本年度は、こうした体験をもとに、方向性の一つとして、バウム画に限らず、広くイメージ体験に考察を深めるため、過去の臨床事例や現在の実践場面においてイメージ体験が介在すると思われる事象について検討を行った。それについては、発表論文の②、③並びに学会発表の①、②において報告している。こうした検討から明らかになったのは、イメージ体験を（「ゆらぎ」として）即言語化を求めるよりも、改めてイメージの次元に落とし、身体的・体感的に味わう（そして可能であればその言語化を求める）ことの重要性であった。「イメージ体験-言語化」より、「イメージ体験別の視点でのイメージ化-言語化」の方が、ワンクッションある分安全に体験できるのではないか、ということであった。

そこで、「描かれた描画に対して、描画でメッセージを返す」という手続きを取ること、新たな局面を切りひらこうと考えた。具体的には、バウム画を数点選び、その絵に対して「メッセージを返すとしたらどのように

描くか」を質問紙で問い（以下ではこれを「バウム返答法」と呼ぶ）、資料の収集並びに分析を行った。

## 2008年度

本年度は、過去の研究データの総括を中心に行った。具体的には、昨年度末に行った「バウム返答法」に関する分析が中心となった。調査で描かれたメッセージとしての描画は非常に興味深いものであり、バウムテストが持つ象徴性と重なりつつも、また違った形での投影法としての可能性を予感させるものであった。

このデータを描画に精通した臨床家とともに検討を行い、KJ法を援用して描画のグルーピングを行い、この質問紙で行われた方法の結果をより精査した。そこでの討議から、「バウム返答法」は関係性の側面がよく表れるのではないかと、という仮説と、臨床を学ぶ初学者自身のかかわりをふり返るいい機会として活用できるのではないかと、という今後の援用可能性について示唆した。

描画を描く際の内的体験は、きわめて茫漠としており、捉えにくいものである。本研究はそれを「ゆらぎ」というキーワードで捉えようとしたが、言語的なアプローチでは依然困難であることが判明した。漠然としたものを、その性質を生かしつつ表面化するための方法論として、言語的表現のワンクッションとして描画での返答を試みる今回のアプローチは、イメージを生かしつつ明細化が可能であるという点で、きわめて意義深いものであると考える。

以上が、本研究の研究過程である。なお、先に挙げた、描画に限らないイメージ体験の検討は、臨床事例を含むものでもあるためここでは割愛し、「バウム返答法」についての研究成果を以下にまとめることとする。

### 《「バウム返答法」の試み》

#### ・バウム返答法とは？

バウム画に対して、「もし絵で返事したらどんな風に返しますか？」を聞くもの。

#### ・バウムを見ての「主観」～イメージでかわること

バウム解釈における「主観性」とは何か。「イメージはイメージのまま感じられるものである」が、下手をすれば「独りよがり」になる。主観と客観の相剋。

「バウムの論理」（奥田）。「バウムを媒介としたアクティブイマジネーション」（鶴田）。イメージをイメージとして尊重しつつ、それを相互主観のものとして開かれた位置に置く。

発想の背景には、いろいろなイメージ技法

や加藤の試み。

「バウム画に対して返事をするとしたら？」という取り組みをしてみたらどうなるだろう。バウムへのコミットメントをさせてみる。→バウム返答法へ

#### ・取り組みの実際

方向性は異なるバウム画を4枚選定（以下“元バウム”）。40%縮小した元バウムに、

- 1) どのようなところに目がいくか（誘目性（皆藤））
  - 2) この絵を見て受ける印象・感覚（印象）
  - 3) （提示した絵と同サイズの枠を提示し）さきほどの絵に対して返事を書いてみてください（以下“返答バウム”）
  - 4) 今の絵はどのような思いで描きましたか。（メッセージ）
  - 5) その他何かあれば自由に
- という五項目への返答を求めた。対象は大学生143名（男性48名、女性95名）。自由記述の質問紙法・無記名。授業時間を用いて集団法にて施行。質問紙1セットに2枚の元バウムをわりふる。

#### ・データの分類（結果）

##### 1) 予備分類

大学生2~3名（男性1名女性2名）とともに検討し、ある種のまとまった特徴を確認した。

##### 2) 分類

その後、臨床での描画使用経験のある臨床家一名の協力を得て、描かれた返答バウムのみ分類（KJ法を援用）。以下では二枚の元バウム（いずれも回答者72名）のみを取り上げる。

#### 〈Baum A への返答バウム〉

誘目性は「実」が88.9%と圧倒的に多く、中でも左の大きく傾いた実への言及が多い。

印象は、「落ち着いている」などポジティブな評価が43.1%と多いが、対極に「寂しい」「不安定」とするものも11%いる。その混合形なのか、「明るいようで暗い」「バランスが悪い」など、両義的なものが36%を占めている。

メッセージは、全体的ににぎやかにしようとするものが目立つ。実への誘目性が高かっただけに実への関与を示すものが多い。しかし、何名か「実はおいしくない」「落ちて新たな芽を出す（あるいは腐る）」と云うイメージを出してきており、印象が割れたことと重なるようでもある。

#### 〔バランスの悪さをどう整えるか〕

元バウムは幾分平均的なバウム画であるが、よくよく見ればバランスの悪さも伺わせる（例えば一つだけ大きな実、なぜか切れている幹、丸い地平線など）。そのアン balan

スさを感じた人は、そのバランスをどのようにして整えるかに取り組んだようである。



図1：Baum A

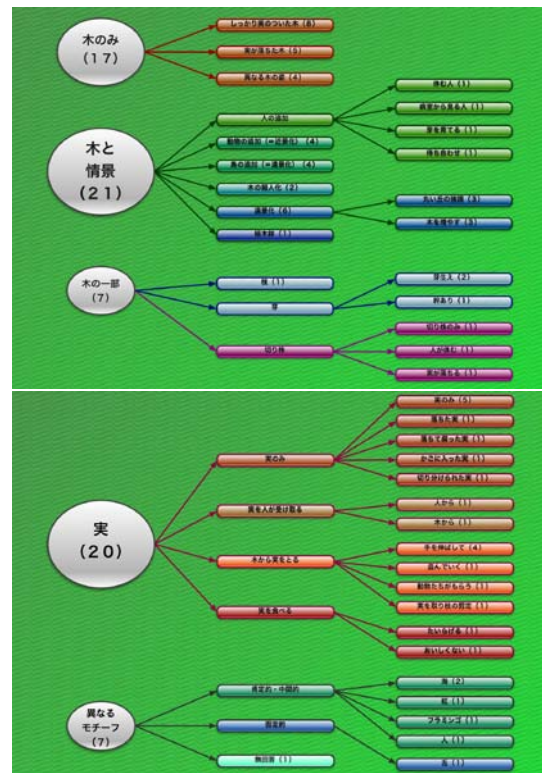


図2：Baum A への返答バウム分類

#### 〈Baum B への返答バウム〉

Baum Aとは異なり、誘目性はばらけた。比較的多いのは実あるいはツタについて（それぞれ26名=36%）。全体的にマイナスの投映（腐っている、枯れている、古そう）が多いが、「枯れている割にはしっかりしている（葉も生えている）」という意見も。

しかし印象については、寂しさ・暗さ、またその比喩的表現（冬・秋など）に類するものが80%以上を占める。その寂しさに対して「浸っている」とするあからさまな反発も3名（4%）見られるが、「好ましい」とする評価もある。「寂しいが昔はあたたかかった」「苦しいけどがんばっている」とする両義的な意見も6名（8%）あった。

メッセージは元気づけようとするものが多い。ただそれが激しくなると「いいから明

るくやろうよ(=鬱陶しい?)となるよう。勿論寂しさに共感を覚えるものいる。また、元気づけるのとは異なり、寄り添う形で少し未来を示すものもみられる。

[さみしさにどう対処するか]

先に示したよう、この絵に対してはさみしさ・暗さが圧倒的な割合で感じられており、それに対してどう対処するかが課題となったようである。

力づけるもの、拒絶するもの、育むもの、寄り添うものなど、様々なバリエーションが見られた。



図3 : Baum B

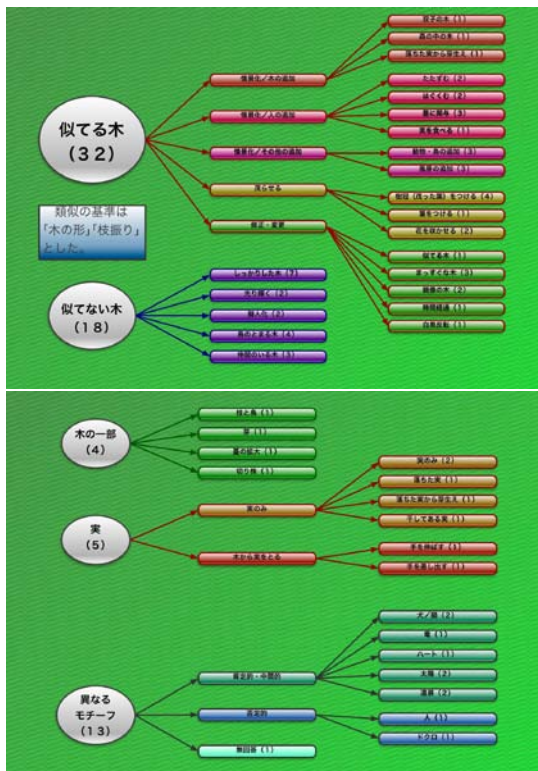


図4 : Baum B への返答バウム分類

・考察

[結果から]

「主観」ではあるが、単なる個人の「思い込み」だけではない。元の絵のある特徴に対して集約される主観性でありながら、その個

人特有の感覚を反映したものになっている。バウム返答法は、その人個人が、ある状況に対してどのように反応するか、という側面を反映しているのではないだろうか。

[バウム返答法は何を見るのか?]

元バウムに対する「解釈」と、それに対する「応答」が同時に表れる。

防衛的反応があまり見られない。防衛的反応をすることそれ自身がメッセージとなる。

バウムテストのように0から絵を作り出すより、「何か」に対する「反応」であることによる投影のしやすさがあるだろう。

通常のパウム画よりも、「その人らしさ」を伺いやすいのではないだろうか。「関係」の側面が表れやすい?

[バウム返答法の展開可能性]

【初学者の訓練として】

バウムを知った臨床家のもと、初学者がグループでバウム返答法をおこなうと、自分が起こししやすい反応(いわゆる逆転移)に自覚的になることもあるだろう。描画に対する感性も磨かれるのではないだろうか。

言語的に自覚するよりも、描画(イメージ)で把握した方が、「自覚しつつ受け入れる」ことが起きやすいだろう。

多様な関与可能性と、その中から選択的に我が身として関与すること(コミットメント)を分かりやすく示してくれるのではないか。それは、臨床をやっていく上で欠かせない姿勢ではなからうか。

[バウム返答法の注意点]

【臨床場面での使用は慎重に】

セラピストが描いた返答バウムを安易にクライアントに返すと破壊的になることもある。自我の脆弱なクライアントにとっては元バウムに返答することが侵襲的に働くことも考えられる。臨床家のセルフモニタリングとして使うのが第一義か。もしくは、ある程度健康さをもった成人の自己洞察の促進に。

【一枚のパウム画が持つ象徴性には欠けるおそれ】

バウムテストの一本の線が持つ迫力。そうしたパワーは少ないかもしれない。

翻ってバウムテストは、やはりそれほど深くて濃いものだと云えるのではないだろうか。

・バウム返答法とは(まとめ)

「返答」という操作を加えることで、描かれた絵を、より我が身に引きつけて(一度自らに受肉して)捉えるようになれるのでは。

描かれたバウムを「対象化」するのではなく、私と「関係化」して捉える。その中で表現されたものが、「返答バウム」なのではないだろうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 山川裕樹、バウムテストの連続施行体験から見えてくるもの、成安造形大学学術活動報告、平成 18 年度、2007、無
- ② 山川裕樹、基盤としての身体性にたちかえること、心理臨床学研究、第 26 巻第 3 号、2008、有
- ③ 山川裕樹、学生相談室発信授業におけるイメージワークの試み、学生相談研究、第 29 巻第 3 号、2009、有

[学会発表] (計 3 件)

- ① 山川裕樹、ヴィジョンと夢を語ること-他者に伝える営みとしての面接過程、日本箱庭療法学会第 21 回大会、2007
- ② 山川裕樹、体験から気付く学びのあり方について、日本学生相談学会第 26 回大会、2008
- ③ 山川裕樹、バウム返答法の試み、日本箱庭療法学会第 22 回大会、2008

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

なし

○取得状況 (計 0 件)

なし

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山川 裕樹 (YAMAKAWA Hiroki)  
成安造形大学・人間学講座・専任講師  
研究者番号：70367887

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし